

内なる念仏の声に導かれ

## 五木寛之が本徳寺を語る

私たちの心のふるさとはどこにあるのか。それを探して始まった百寺巡礼。この旅の果てに何が見えてくるのか。

度重なる解体移築の歴史、そこに権力と対峙した寺院のドラマがありました。十六世紀の中葉、日本史上初めて近畿各所の民間勢力がネットワークをつくり、時の権力に対峙しました。

その最西端、播州におけるこの新興自治都市が英賀本徳寺である。

民衆のエネルギーを集めてつくられた一大宗教都市の精神は存亡の危機を乗り越え、今も、亀山本徳寺に語り伝えられています。

『百寺巡礼』より

本徳寺本堂北側の広縁で、新撰組の隊士が斬りつけたと言われている傷ついた柱に触れながら、血気盛んな若き隊士の心に思いを馳せ、歴史を体感する五木寛之さん。

2004年4月28日午後1時頃



テレビ朝日6月5日放映  
『五木寛之の百寺巡礼』 亀山御坊本徳寺編  
ビデオは寺務所にてお取り扱い致します



国家主導型の奈良や京都の旧仏教の装飾性を嫌い、質朴として天にそそり立つ巨大な伽藍群を前に、五木さんは浄土真宗の寺院が民衆の法城として誕生した歴史に思いを馳せた。

2004年4月28日午前10時頃

近代以降、外来文化の流入は歴史的な体験を欠落した知識だけの普遍主義となつて日本を覆いました。この普遍主義は近代という国家お墨付きの価値序列を与え、日本人を(number one)競争に駆り立てることに成功しました。特に戦後の混乱から日本の国を建て直し、世界有数の経済大国を築くにあたって大きな原動力であつたのでしよう。しかし、将来のモデルなき個人の時代を生きて行くために、出来合いの有り難い権威(普遍主義)に頼ることはもはや許されないことです。

世界が画一的に文明化され、個人が世界に直接露出する時代には、自らの頭で考え、行動して行かねばなりません。しかし、不幸にもこの五十年間、日本人は自分で考えることを停止してきました。今一度、歴史的産物としてしか存在し得ない個人の原点をさぐり、そこから立ち上がるしかないようです。

中世という時代に、名もなき民が念仏の教えに照らされて、自らの内なる「いのち」の深淵を始めて知りました。この「いのち」の実感が自らを変え、新しい生活文化を生み出していく原動力だったのです。この創造の活力がいま必要とされているのではないのでしょうか。普遍的なものは具体的・特殊な歴史的身体(only one)を通して、始めて普遍的な力を発揮するものです。

五木寛之氏も本徳寺の取材を通して、心のふるさと探しに大切なヒントを発見されたのではないのでしょうか。

(真宗文化研究室・大谷)